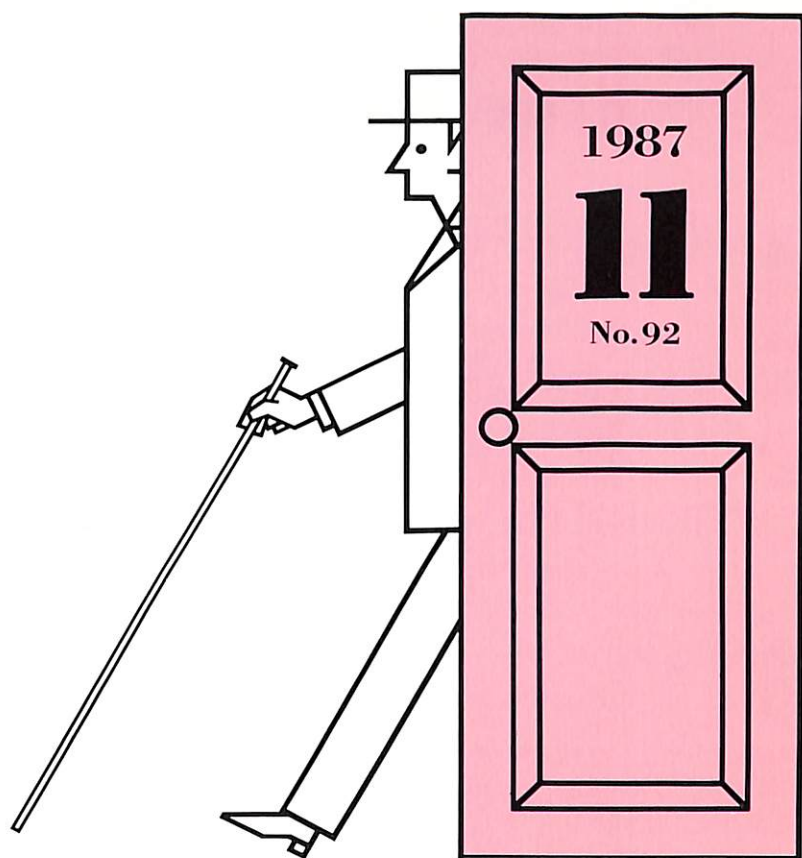


昭和四十六年六月一七日 第三種郵便物認可 昭和六十二年一月一五日 SSK通巻第一六一七号 (毎月六回、5の日、0の日発行)

視覚 障害

その研究と情報

特集＊2代目、3代目の想い



ISSN 0385-7476
SSK

標準点字表記辞典

改訂版

A5版 288ページ ケース付

定価 1,700円

改訂版が完成しました!!

8人の編集委員が、各方面の意見を聞いて最も正確な改訂版をつくり上げました。5年半にわたる労苦の結晶を自信をもっておすすめします。

お申し込みは、一般書店または日本点字図書館用具部へ。

発行 日本盲人福祉研究会

発売元 株式会社博文館新社

目 次

1987年 11月 No.92

2 ページ評論	田中 亮治	2
---------	-------	---

特集 2代目、3代目の想い

視野を狭くしないように	後藤 健市	5
犬が畏敬の念を持つ父	塩屋 隆男	9
いくつもの時代をこえて	仲村 哲郎	13
仕事は祈り	杉山 嘉信	16

この人と語る

継続することに意義がある	近藤 正臣・斯波 千秋	19
--------------	-------------	----

私と統合教育

三村栄子さん ― みんなとの距離がわかった		32
-----------------------	--	----

自叙伝による近代の盲人像 第8回（最終回）	谷合 侑	38
-----------------------	------	----

インフォメーション・コーナー		47
----------------	--	----

日本盲人福祉研究会研究費助成制度規定		58
--------------------	--	----

編集後記		64
------	--	----



2代目でも命がけで

社会福祉法人東京光の家理事長 田中 亮治

私がこの道に入ったのは昭和33年4月ですから、もう、かれこれ30年になります。30年前における日本の社会福祉の状況は、今と比較すれば雲泥の差があり、戦後復興期の緒ともいえるべき“茨”の時代だったようです。この年、わが東京光の家は杉並区から現在の日野市に移転した時で、私の盲人福祉との歩みもここから始まったのです。当時私は、学校の教員をしており、たまたま同じ学校に奉職していた今の妻と結婚したのが昭和32年5月でした。この家内が東京光の家の創立者である秋元梅吉の娘だった訳です。私はもともと師範学校の出身であり、結婚した当時は社会福祉の道に進むことなど全く考えてもみませんでした。多分、自分の生涯は教職をもって終わるであろうと、漠然とではあったが、そんな気持ちでした。ただ家内だけは、結婚と同時に教師をやめ、父親の手伝いをするため東京光の家で働くようになったのです。こんな次第で、結婚以来私は何かと東京光の家に足を運ぶようになり、岳父である盲目の人秋元梅吉に触れることが多くなりました。又、東京光の家の事業実態も少しずつ分かるようになったのです。当時、救護施設となっていた東京光の家は、経営的にも苦しく、建物規模も貧弱そのものでした。まさに、社会の片隅で陽の当たらない仕事をしている、といった感じでした。私には、社会福祉というものは、人のためとは言っても何と大変な苦勞を負うものだなあ、と感じられたものです。

そうこうするうちに、私の心にも一つの変化が起き始めたのです。家内が苦勞しながら頑張っていることや、目の不自由な岳父が、すべてを投げうって同じ盲目の人々のために尽くしている姿を何回も見ているうちに、自分だけは学校の教員としてのんびりしていて、いいのかなあという焦りのような気持ちにさせられたのです。私の

胸中はいささか複雑なものでしたが、教職を続けるべきか否かとそれなりに悩みました。結局は、東京光の家が日野市に移ることに合わせて、私も思い切って教職をやめ、何にも分からない盲人福祉の世界に飛び込んだのです。当時の心境を少々大袈裟に言えば、泳ぎの出来ない人が、「目をつぶって海にダイビングした」ようなものでした。

さて、主題にどう答えてよいのか、その言葉がありません。というのは、私には大それた使命感もなく、特別な理由もなかったからです。何となく「お手伝いしなければ」という程度に過ぎなかったのです。ところで、良く考えてみれば、2代目というのは大体そんな精神的状態で継ぐのが多いのではないのでしょうか。だから、初代の強烈な使命感と比較されたりすると、大きな負担を感じると思います。しかし大事なことは、この仕事を先ず引き継いだということではないのでしょうか。動機はどうであれ、現実に関引き継いだ仕事に誠実をもって打ち込んでいるかどうかが重要であると思います。よく「2代目は駄目にする」と言われるが、福祉事業の場合は違うような気がします。というのは、経済的にも組織的にも整えられた事業を引き継ぐのであれば、それを食い潰すということもあり得るが、これまでの状態は、食い潰す物さえもない事業を継ぐようなものだったからです。私なども、最初の仕事は食い潰すどころか、借金返済のため走りまわることが主だったのです。

それでも現在は、福祉の制度もようやく向上し、かなり恵まれた状況にあります。しかし、いつの時代でも福祉事業には苦難が付きものです。命がけでないと事業運営などできません。世が変わり、人が変わっても福祉事業は永く遺るはずで。今後この世界で生きる人は、その動機は何であっても、一旦入ったからにはその社会的使命を強く自覚され、創立者の情熱の灯を絶やすことなく、更にその上を目ざしてほしいものです。これは、私自身に対する自戒の言葉でもあります。

立ち読み版はここまでとなっております。

続きをお読みにになりたい場合には
社会福祉法人 視覚障害者支援総合センター
までお問い合わせください。

編集後記

先人が生みだし、育てあげたさまざまな形での業績を、さらに充実発展させた形で後世へ伝える、そうした努力の積み重ねが人類の精神史、文化史を形造っているのだとしたら、本号で企画した私たちの特集は、日本盲界文化史の上で、間違えようのない確かな一つの意味を持つものと確信します。それにしても、初代の偉業をその肩に受け継いだ若き2代目、3代目は、今何にあこがれ、何を夢見、また、何を目指して自らの未来を模索していることでしょう。

私は、今回の特集に執筆していただいた方々の語る一語一語に、いつか胸の痛くなる想いを禁じえませんでした。明日の盲界はきっとすてきなものになる、その確かな手応えを、私は彼らの言葉の端々から受け留め得たような気がしてなりません。そして、そのよくなるであろう明日の盲界のために、われわれもまた彼らと歩を合わせて、前進への歩みを続けねばと心に誓うのです。（岩山光男）

視 覚 障 害

1987年11月 No.92

年間購読料 3,000 円（送料とも）

発行日 1987年11月 1 日

編集人（連絡先）

日 本 盲 人 福 祉 研 究 会

〒 166 東京都杉並区成田東 5 丁目 36 番
15 号

電話（03）220 - 1421

振替口座 東京 6 - 1 6 1 0 3

発行人 身体障害者団体定期刊行物協会

〒 157 東京都世田谷区砧 6 - 26 - 21

印刷所 合同印刷株式会社

〒 130 東京都墨田区業平 2 - 9 - 13
電 話（624）6111（代表）

協賛団体

日本点字図書館